もえぎ vol.84
Architectural Design and Machizukuri Office

一級建築士事務所　企業組合もえぎ設計
京都市上京区笹屋町通大宮西入桝屋町601
TEL075-431-1120 FAX075-431-1123
http://moegi-archi.com/

「企業組合 もえぎ設計」と　父の話

父は書を得意としていた。変な言葉だが「実用的な書家」が私の感覚に最も近い。ハガキの宛名、横断幕、表彰状、橋や墓標の銘・・・等々、請われれば何でも書いたようだ。私が設計の仕事を始めてからは、設計した住宅の表札や事業所の看板を頼んだりもした。

「企業組合　もえぎ設計」のロゴも父に依頼したもので、私の「少し変わった字で」との注文に困惑したのか二十九もの案が送られてきた。その中から選ばれたのがこの文の題名にあるロゴだが、本人はあまり気に入ってはいなかったようで、会うたびに「何であれにしたんだ」とぼやいていた。（少し照れがあったのかもしれない）

私は幼い頃から父の手ほどきを受けていたが、例えば「か」を書くと「加」が元の漢字だから「力」とその横の「丶」は偏と旁（つくり）なのでバランスは一対一でないといけない、という解説付きで訂正された。子どもに基本を教える場面だけではなく、父の書は総じて奇抜さを嫌い、基本を大切にしながら自分らしさを表現する事を良しとしていたように思う。私は小学校卒業と同時に破門された。「お前の字は活字みたいで書道に向いていない、デザインの方向に進んだ方が良いのではないか」というのがその理由だ。今から思うと設計者への道はそこが出発点かもしれない。

父は扁額や掛軸も書いているが家に残っている物は少なく、お寺や親戚の家に行くと「これはお父さんの書ですよ」と見せてもらえることがある。私はその中でも叔父の結婚祝いとして贈ったという作品が好きだ。「温故知新」と書かれたその扁額は高校生の時の作らしく、力強くはつらつとしている。私が手元に持っているのは、亡くなる少し前にそれを予感していたかのように遺してくれた「光風動春」という掛軸だけだ。明るく輝く光と心地よい風が春を連れてくる。寛大でおおらかな心が、幸福を運んでくる・・・というような意味があり、お祝いでよく使われる言葉のようなので、正月に事務所の玄関に飾って楽しんでいる。年齢によって趣は変化しているが、どの作にも父らしい芯のようなものを感じる。

今年の４月１日にもえぎ設計は 30 周年の節目を迎えた。振り返ってみると、たくさんの挑戦をし、時には失敗もしてきたが、設立時に時間をかけて論議してきた「芯」は、多くの人たちの支えもあり何とか貫いてこれたように思う。30 年は一世代、もえぎ設計は新しいステージに立っている。今、それぞれが見ている夢も力を合わせて実現していくことだろう。ロゴが事務所とともに歩んでゆくことを、きっと父は喜んでくれているに違いない。

田村　宏明